

これからの漢文教育

田部井文雄

これは果たしてわが国の漢文教育に、「これから」すなわち、「未来」はあるのか、という問いかけである。この度二百号に達したという『漢文教室』と称する雑誌に、最もお世話になった一人として、一言なかるべからずということであろう。

ここにいう漢文とは、中国の古典をそのままに、日本の古典として輸入し活用した世界有数の文化財である。それをそのまま、日本語の教材として、現在の小・中・高の教室に持ちこむことへの疑問は、常に投げかけ続けられてきた。昭和初年生まれの人々が教職に就いてすでに半世紀以上、その間、漢字・漢文の教育の必要・不必要の論を耳にしない時はなかった。そのことについて、ここに詳述する紙数はない。結局ここには、最近も耳にし得た次の二件について述べるにとどめる。

その一は、小学校における漢字教育についてである。日本国中どこの小学校でも、漢字教育は漏れることなく続けられている。文科省の検定教科書をはじめ、現在日本語の刊行物である新聞雑誌などはすべて漢字まじりの文章で綴られている。漢字の教養なくして日本文の読解は成り立たないのである。

世にいう漢字離れの風潮の中にあつて、それにしばし待ったをかける存在として、うら若き女性教師群がいるとしたら、われわれ高齢者ならずとも耳をそば立てるに違いない。何事も事を成

すのは人材である。漢字教育を担うのも人である。その人材を思い浮かべるだけでも「未来」への期待がうずくとしたら、余りに甘い幻想とされようか。筆者も彼らの教室の公開授業を再三にわたって見学した。全国漢文教育学会の機関誌『新しい漢文教育』が「漢字」の二字を加えて、『新しい漢字、漢文教育』に改められたのも、漢字教育隆盛のためであったと聞く。

続いて、国立大学志願者に必須として発足した「共通一次試験」について触れたい。当初その配点は、現代国語140点・古文・漢文それぞれ30点ずつであった。それが間もなく、100点・50点・50点に改められたのは何故であろうか。全国の国語関係の教師たちを始め、多くの具眼の人々の強い要望によることはいまでもない。このような「改善」を可とする反面、「大学入試センター試験」と改称されたこの試験から「漢文」が削除される日が来るかも知れないとしたら、漢文教育が致命的な痛手を蒙ることは必定である。この試験には私学もどっと参入しているが、それらの大学は、すでに漢文の問題は除外して実施している。

ここには今に漢字教育の「明」の一面と、漢文教育の「暗」の側面とを挙げるにとどまらざるを得ないのである。

漢文を学ぶ——現代の教養科目として

さいとう
齋藤 希史

(東京大学)

漢字漢文を媒体とする読み書きの世界。その歴史と意義をいかに伝えるか。私自身が大学で漢文関連の授業を教養科目として行うとき、まずそこが起点となる。

本務校では、センター入試の国語に含まれる漢文はもちろん、二次試験（前期日程）でも文理問わず漢文を受験科目として課している。その点では、入学した学生にはとりあえず漢文の知識はある。返り点と送りがなを頼りにして漢文を読むくらいは、受験勉強の延長で何とかなる。理系の学生のほうがむしろ得意だったりすることも多い。けれどもそれはただ読んでいるだけでしかないということもしばしばだ。機械的もしくは表面的に読んでいるだけで、こことは異なる別の世界のことばとして、ある質量をともなつて受け取ってはいないのである。

本来、漢詩文を深く読むには、それがこことは別の世界だという意識が要請される。しかし受験科目としてはなるべく身近に考えるほうが得策だから、題材としても、私たちにとって親しみやすいところ、わかりやすいところが選ばれる傾向にある。そうなると、漢文で書かれた世界の全体像がつか

めない。明らかに現代とは異なることばの世界であるのに、現代に通じるところばかり求めてばらばらにしてしまう。その延長では、大学の授業で漢文を取り上げる意味はあまりない。とはいえ、中学校や高等学校の多くの生徒にとって漢文はそもそもなじみがない。かつては格式ばつたことばとして目にも耳にもしていた文語体はほとんど見かけられなくなつた。そうした環境で漢文に興味をもつてもらおうとすれば、生徒たちにとってそれが決して遠い世界ではないことを伝えるほうが近道なのはたしかだ。断片的であれ、漢詩や漢文の世界に触れ、その初歩として訓読という技法を身に付け、漢詩や漢文を読む第一歩となるのなら、意義はたいへん大きい。

それを踏まえた上で、大学では、まずそうした断片を繋ぎ合わせる事が重要だろう。漢文に限らず、おそらくあらゆる科目において言えることなのだろうが、受験勉強は、知識を統合するよりも断片化し単純化してしまう。一方で、それによって短期間に多くの知識が得られるというメリットもある。大学の、とくに教養教育の役割の一つは、大量の断片化された知識（大学受験直後の知識量はかなりのものだ）を繋ぎ

合わせ、さらに深めることにある。それはあれと関連がある、そこそこはこのように繋がっている、と。それによって、漢文で書かれた作品群が現代とは別の秩序をもっているという認識へと導かれる。

現代の何かとの個別の関連ではなく、漢詩や漢文の中での繋がりを示すこと。例えば月をうたう詩。さかのぼれば『詩経』からあり、漢代古詩でも月光は重要なモチーフである。李白における月はしばしば學術論文の主題ともなる。テーマを追いながら詩文を読んでいくことで、おのずと世界が浮かび上がる。あるいは、月なら何といつても蘇軾「赤壁賦」とばかりに、そこに『詩経』が言及され、曹操の「短歌行」が核となっていることに触れつつ、典故と実景と創作の相互連関という古典文学の核心を示すという手もある。人口に膾炙した詩文からだけでも、多くのことは引き出せる。

中学や高校の教材として学んだ詩や文章は、もともととばらばらのものではなく、漢文世界を構成する表現の一つであった。後代のものは何らかのかたちで前代のものを意識して書かれていて、別の言い方をすれば、何かを書くことは、まず何かを読んで、そこに自分の書いたものを並べ置くことだった。思想においても同じことで、思考のことばはつねに先行者との対話によって生み出された。

そのような理解を促しながら、漢字による読み書きの世界の秩序を示し、さらに類書や幼学書を取り上げて、人々がど

のようにそこに参加していったかを説く。中学高校で初歩をならった訓読という技法を振り返るのは、このあたりが効果的だろうか。中国大陸からもたらされた文字の世界に加わるために、中国語とは異なる言語を話す地域ではどのような方法があったのか。朝鮮半島との比較も含めつつ、訓読の歴史的な展開を知ること、漢文読解のためだけではなく、漢文世界の広がりを知る上でも訓読が重要な知識であることがわかる。さらに訓読を実践することで、日本のことばがどのように形作られたのかを追体験することもできる。訓読体が近代文体の基盤になっていると知ること、重要だろう。

いま自分がいるところとは異なる思考や感覚をもつ世界があるのだと知り、ひるがえって自己の世界を相対化し、より豊かな世界を展望する力を得る。現代が漢文から遠く離れてしまっているからこそ、漢文を学ぶことはそうした意味での教養となる。中国古典文として専門的に学ばなくとも、訓読のおかげでその世界には意外に入りやすく、そしてその世界を経めぐらううちに、思いがけないところで現代の私たちとの近さを発見することもあるだろう。伝統という括りよりももっと実感に即した過去との繋がりが——と同時に距離——がそこで感知されるなら、異なる世界がじつは私たちの世界の前提であったと知ることにもなる。

二十一世紀の日本だからこそ、教養科目としての漢文は必要なのだと思う。

●特集Ⅱ漢文教育のあゆみと展望

「提言」漢詩教材の効用

向嶋 成美

(筑波大学名誉教授)

私が初めて漢詩に触れたのは、中学生の時です。今でこそ中学国語の教科書には結構多くの漢文教材が載せられていて、漢詩も必ず入っていますが、私の中学生当時は教科書で漢詩文を学ぶことはありませんでした。確か二年生の時だったと思います。国語の担当はポマードで髪の毛を綺麗に整えたダインディな風貌の森下先生という方でしたが、ある授業時に、当時のことですからガリ版刷りの印刷物を配布してくださいました。そこに漢詩が収められていたのです。

採り上げられていたのはすべて五言絶句で、杜甫の「絶句」詩や李白の「静夜思」詩などが原文に書き下し文を添える形で示されていました。私はそれまで日本の和歌、俳句や西洋の詩を翻訳したものをある程度は知っていました。ところが漢詩はそれらとは全く趣を異にするものでしたから、驚嘆しかつ興味を抱きました。ですから教わった漢詩の全てをその日の内に暗記し、それらは今もよく記憶しています。

それらの中で妙に魅力的であったのは、賈島の「尋隠者」不遇(隠者を尋ねて遇わず)「詩でした。

松下問「童子」(松下 童子に問う)

言師採_レ葉去 (言う 師は葉を採りに去ると)

只在_二此山中_一 (只だ此の山中に在らん)

雲深_レ不知_レ処 (雲深くして処を知らず)

『唐詩選』に採られていることで日本では比較的馴染みの深いもので、隠者を訪問したところ、あいにく隠者は葉草採りに出かけていて、会えなかったという詩です。隠者が住まいの雑用のために使っていた少年が留守番をしていて、その少年のことで隠者不在の理由が語られています。中学生当時の私にこの詩が持つ幽玄の境地を十分に理解できたのかというと、それははなはだ疑問です。しかしこの詩にはあまり難解な語句がありませんし、作詩の状況についての知識も格別に必要とはしませんので、中学生でも詩にうたわれている世界をイメージしやすかったのだと思います。

「隠者を尋ねて遇わず」詩の場合もそうなのですが、漢詩は全てを説明し尽くすのではなく、余計なものは削ぎ落として簡潔に表現されているところに特色があります。読者の側では詩の表面にはうたわれていない所を適宜補いつつ読み取ってゆく必要があるのです。そのことは時として異なる解釈を生むこともあります。それはそれでよいのです。教育の場でもそれをうまく利用すれば、また面白い効果が期待できるのですから。表面にない所を補いつつ読む作業は、言わば知的営為です。漢詩を指導する時、若い生徒の豊かな感受性を存分に生かしつつ、知的に取り組む姿勢を養うことは大切であると思うのです。

大学における訓読教育の必要性

つちだ けんじろう
土田 健次郎
(早稲田大学)

筆者が大学生の時、中国文学の教員が担当していた漢文の授業は、訓読の前にまず中国語で音読をさせるもので、それで四分の一くらいの時間を費やした。後に筆者が大学で漢文の授業を担当するようになった時は、最初の時間に中国語で音読してみせて、音読とはこのような感じのものだと言、あとはひたすら訓読を教えた。学生に中途半端に音読させても、お経のようなもので身につかない。それに漢文の授業に出てくる学生は、日本の文化や歴史を学ぶ学生も多いので、中国語履修者ばかりではない。

筆者には持論がある。それは大学では現代中国語と古典中国語(中国語として漢文を学ぶもの)と漢文訓読の三つの授業があるべきだというものである。現代中国語をある程度学んだ学生が、中国語の音読で中国語として漢文を読む授業が本来はあるべきなのである。その場合の教科書は以前なら王力の『古代漢語』あたりであろうか。この書は中国人用漢文自習書として有名であった、筆者は一度ために漢文の授業で使ってみたことがあるが、あまりうまくいかなかった。というのは中国人にとってやさしい漢文と、日本人にとってのそ

れとは、ずれるのである。『古代漢語』はあくまでも現代中国語を操る者にとって入りやすくできている。

ともかくも筆者が言いたいのは、大学でも漢文の授業の方はしつかりと訓読だけを教えればよいということである。以前このようなことをある講演の際に述べたら、他大学に勤めている先輩から、自分のところでは音読も取り入れて学生もみな読めるようになっていると力まれて困った。それならばその大学出身の若手が中国学界をリードしているはずであると憎まれ口を言いたくなかったが、それほど筆者の経験から言えば簡単なことではない。一部の秀才はともかくも、多くの場合は中国語と訓読の両方の基礎がしつかりできてこそ相乗効果をあげるのであって、両方とも未熟なうちに混ぜてしまつては中途半端に終わってしまう。

筆者は、訓読とは、中国の古典を日本の古典にする作業だと思つている。訓読があるおかげで、悠久な歴史を持つ中国の叡智と美の結晶を日本人が自分たちの古典として感じられるのである。また日本の思想宗教や歴史関係の書は漢文が主流であり、日本人の手になる漢詩文も多い。つまり日本文化

を知るには訓読学習が必須なのである。それゆえフランスで長い歴史を誇る東洋語学校（現在のフランス国立東洋言語文化研究所）では昔から漢文訓読の授業がある。

中国の漢文は訓読することで、日本語の古文で書かれた古典と並ぶ。だから訓読した後、古文と同じようにもう一度頭の中で正確に理解しなおさなければならず、訓読はそのままで現代語訳と並ぶものではない。以前から中国語音読と漢文訓読のどちらが中国の漢文をよく読めるのかということが議論されてきたが、筆者には不毛に見える。漢文はもともと語順が重要であり音でも味わうものであるし、訓読の場合には時に日本語に引きずられるから、音読派の主張にも理があるが、だからといって音読派が常に訓読派よりも漢文をよく理解できるわけでもない。どちらの方法を取るにしろ、最終的には意味が正確に取れる人が「読める」だけの話である。

倉石武四郎博士が戦前に中国留学した際に「訓読は玄界灘に捨ててきた」と言ったことは音読派の決めぜりふとして有名である。中国語の音を頭に思い浮かべながらあくまでも語順に沿って読むことを自分に課そうという決意表明として意味のある語ではあるが、玄界灘を渡った後でも訓読で培った学殖が漢文読解に生かされていたはずである。中国語音読の必要性を強調し続けた吉川幸次郎博士でも「自分は中国の詩だけは、訓読しないと読んだ気がしない」と再三言っていたそうだが（島田虔次「お貸しした本」、『吉川幸次郎』所収、筑

摩書房、一九三三、日本語で育った日本人の言語感覚の中には、すでに漢文訓読調が埋め込まれている。江戸時代の荻生徂徠は中国語音読論者として著名である。しかしその徂徠ですら、漢文は「読む」ものではなく「見る」ものだが、我々はそのようにはできないと言っている（『訳文筆蹄』巻首）。日本人の場合、いくら音読で読んでもどこかで頭で読んでいて、それこそ見るように自然に読んではいけないのである。なおギリシア哲學家の田中美知太郎博士は、音読派と訓読派の対立には、現代中国賞賛派と伝統中国尊重派の立場の差という側面もあることを見抜き、そのうえで音読派を徹底するならばギリシア研究者のように発音もその当時のものを復元して読むべきではないかと言っている（「シナ学の混乱」、『直言』、そして考察』所収、講談社、一九七〇）。付言すれば同じくギリシア哲學家であった岡田正三博士が戦前に日本漢字音による直読を提唱されたことがあるが、これのみを採用するのには無理があり、もし意味を持つとしたら、それは安達忠夫氏が実践されていたような訓読との併用の場においてであろう（『素読のすすめ』、講談社、一九七〇）。

日本人である限り日本文化を知るために中学校・高等学校で古文と漢文は学ばなければならない。それならばそこで学んだ訓読を中国古典の読解に対しても生かせばよいだけの話なのである。それを訓読対音読という二者択一の図式にはめ込んでしまうのは、狹量以外の何者でもなからう。

●特集Ⅱ漢文教育のあゆみと展望

漢文学習で身に付く力とは

加藤 和江

(埼玉県立浦和西高等学校)

なぜ漢文を学ばなければならないのか。高校生の多くがそのような疑問を抱いて漢文学習をしているように思う。古典としての漢文学習は、さまざまなことを教えてくれるように思うのだが、最近感じたことを二点述べてみたい。

(一) 訓読力は類推力

漢語(漢字の熟語)は、現代日本語の5割以上を占めるといふ。漢語の意味が分からなければ、現代文が読めない。いちいち、辞書を使って調べていたのでは時間がかかる。難解な字に出合った場合、意味を類推して「読む」ということが一般的に行われていることではないだろうか。

しかし、考えてみると、この「漢語の意味を類推する力」は、漢語の基本構造がわからなければ、身につかない力である。たとえば、小学生の時、「読書」は、「書を読む」から「読書」というのだと習った。その時は、中国語は日本語と語順が違い、構造的には「述語+目的語の関係」にあるということを知らなかったのだ。では「就職」という語はどのような意味か、などと類推して発展的に考えることをしなかったように思う。

高等学校の漢文学習では、最初に訓読の仕方を学習する。中国語は語順が日本語と異なるから、文の基本構造を学ばせ、「返り点」「送り仮名」「書き下し文」を学習させる。この時、「漢語の構造は漢文の構造と同じである」ということを理解させると、漢文の構造ばかりか、普段見慣れている現代文の文章を読むときにも、漢語の意味を基本構造から考え、訓読し、語の意味を類推する力がつく。漢語の語彙ばかりか、訓読のわかる漢字の語彙も増やすことができる。初歩的で基本的な漢文学習が現代文読解に役立つ力になるといえるだろう。ただし、日本人が作り上げた和製漢語や仏教語、近代中国音に基づく漢語など、漢語にもさまざまな種類があるので、この方法ですべて処理できるわけではない。その時こそ、辞書を引いて、さまざまな文化の影響を受けてできあがってきた日本語の奥深さを知ることができると思うのである。

(二) 消費者教育につながる?

漢文入門期の教材に、『列子』黄帝編に収められた「朝三暮四」が取り上げられることがある。宋の狙公は自分の家族の食べる分を減らしてまで、猿たちに食料を与えていたが、

いよいよ家が貧しくなると、食物の量を制限せざるをえなくなつた。どんぐりの実の総数は同じであるのに、猿たちを言葉巧みにだまして、得した気分させてしまう話である。全体を見ることのできない猿たちの愚かしさが印象に残る話であるが、『列子』は、「狙公」にスポットライトを当てて、この寓話を通して、言葉巧みに人々をだます「聖人」を批判している。なぜ、猿たちはだまされたのか。目先の利益にとらわれたから、という解答は、今日の記事成語としての意味に即した答えともいえるが、もう少し原文を忠実に読んでみると、「狙公」の、言葉だけではない、だましのテクニクというようなものが見えてくる。

先^ツ誑^{キテ}之^ヲ曰^ク、「与^ニ若^ク芋^ヲ、朝^ニ三^ニ而^{シテ}暮^ニ四^ニ足^ル乎^ト。」衆狙皆起^{リテ}而^{シテ}怒^リ。俄^ニ而^{シテ}曰^ク、「与^ニ若^ク芋^ヲ、朝^ニ四^ニ而^{シテ}暮^ニ三^ニ足^ル乎^ト。」衆狙皆伏^{シテ}而^{シテ}喜^ブ。

(先づ之を誑きて曰はく、「若に芋を与ふるに、朝に三にして暮に四にせん、足るか。」と。衆狙皆起ちて怒る。俄かにして曰はく、「若に芋を与ふるに朝に四にして暮に三にせん、足るか。」と。衆狙皆伏して喜ぶ。)

すなわち、「狙公」は猿たちの反応を最初から予測し、冷静に判断する時間を与えず、すかさず(「俄而」)次の言葉を発しているのである。

この教材を、だまされる側だけではなく、だます側の巧妙さは何か、という観点でみると、言葉だけではない、さまざま

まなものが教訓として見えてくる。「どうしたらだまされな
いか」ということで考えれば、今日いうところの消費者教育
にもつなげて学習させることができるのではないだろうか。
また、「朝三暮四」の故事を次のように用いた新聞記事を
目にした。

：古人はこのような未来を軽んじる時間意識のありようを
「朝三暮四」と呼んだ。私たちは忘れてはならないのは、
「朝三暮四」の決定に際して、猿たちは一斉に、即答した、
ということである。政策決定プロセスがスピーディーで一
枚岩であることは、それが正しい解を導くことと論理的に
つながりがないということを莊子は教えている。

(二〇一三年七月二十三日付『朝日新聞』内田樹「二〇一三年
参院選複雑な解釈」)

「朝三暮四」の今日的な意味からすると、「未来を軽んじる
時間意識のありよう」という解釈はない。しかし、寓話がさ
まざまな教訓を我々に与えるものであることを考えると、内
田論文のような使われ方があってもよい。故事成語が今なお
力をもって、現代の私たちに語りかけてくれることを知る好
例といえるのではないだろうか。

漢文学習によって、日本の古典を読む力や『山月記』など
のように中国古典を下敷きにした作品を読む力がついたり、
中国の歴史の理解の一助となったりすることは言をまたない
ことだろう。そうではない側面について考えてみた。

教科書に登場する古文・漢文が落語台本になったら

(滝川第二中学校・高等学校教諭、落語作家)

井口 守ぐら まもる

「なぜ古文・漢文を学ぶのか」という生徒からの問いに對して、「うるせえ、とにかくやれ」では現代の中高生は納得しません。かといって、「受験で必要だから」という答えも何だか寂しい気がします。私は（これが完璧な答えかと言われると困りますが）「先人達も私達と同じように、泣いたり笑ったり困ったりして生きていたということを知って、今に生かす糧とするため」と答えるようにしています。

当たり前の話ですが、古典も昔は「現代を切り取っていた」のです。今流行している書籍も、残っていればいつかは「古典」になる日が来ます。私達が共感し涙を流したあの本の、あの一節を取り上げて「西暦二〇〇〇年代前半の人々は、この言い回しに共感して涙していたんですね」と、西暦三〇〇〇年代の国語教師が解説をし始めるわけです。そう考えると大きな流れの中に私達が存在していることが改めてよく分かります。

もちろん、時代が異なるのですから現代感覚とかけ離れているものもあるでしょう。韓非子の「侵官之害」などは「風邪ひかんかったんやから、良えやないですか」と生徒は言います。しかし、白居易「長恨歌」で、馬嵬坡にて楊貴妃が死

ぬ際には生徒もまた悲しみを共有しているように思います。喜怒哀楽、人情の機微は、時代によって形や言語は多少変わっても、根底にあるものは似通っているのではないかと。だったらそこから学ばない手はない。このことが古文・漢文を学ぶ意義なのではないかと私は思うのです。

さあ、学ぶことの大切さは何となく理解できても、日頃はそう触れることのない世界に勢いよく飛び込むというのは至難の業です。私も兵庫県にある私立中高一貫校の国語科教師ですから、生徒達がいかに苦戦しているかは日々実感しております。「古典の文章は古臭くてとっつきにくい」「句形が覚えきれなくてよく分からない」など、とかく古典の世界を理解するまでに至らないケースもしばしばです。この現状を何とか打破できないかと思案した結果、生まれたのが「古典落語」でした。「寿限無」「饅頭こわい」といった、あの「古典落語」ではありません。つまり、古典の教科書に掲載されている古文・漢文を落語台本にするということです。

私は大学時代、落語研究会に所属しており、学園祭などで「三題噺（三つの御題を盛り込んだ即興落語を披露すること）」に取り組んだことがきっかけで、落語台本の創作を続けてき

ました。現勤務校で国語科教諭となつてからも余暇を利用して台本を手がけ、落語台本の公募企画においても度々受賞できるといふ作品を書けるようになりました。そして、時にはそういった受賞作の披露会がきっかけで、お知り合いになれたプロの噺家さんにネタ下ろし（台本提供）をするようになります。台本は演じられてこそ値打ちがあると思いますので、その点で私は恵まれていると常々感じております。

私の勤務する滝川第二中学校・高等学校の校訓の一つに「雄大寛厚」という言葉があります。我が勤務校はこの言葉の通り、実に広い心で「古典の教科書を落語にして読み聞かせる」ことを受け入れてくれております。もちろん、カリキュラムに従つて押さえるべきは押さえて授業を進めていくわけですが、私は授業で扱った題材のまとめとして「古典落語」を読み聞かせるようにしています。いきなり教壇で着物姿に正座という訳にはいきませんし、そもそも「落語作家」である以上、人前で落語を演じるのはプロの噺家さんに失礼だという思いがありますので、あくまで落語作家らしく台本を配つて「じゃあ、落語風に読むからね」と前置きした上で、一席語ります。

前半に内容をおさえて、それを受けて後半に登場人物が失敗する「仕込み噺」の形もあれば、ストーリーを関西弁で追いながら進んでいく噺もあって、形態は様々です。肝心の生徒による感想も（私自身の主観が入りますが）概ね好評のようで、定期考査前には配布した落語台本に蛍光マーカーを引い

て試験勉強に使っている生徒もいました。最近では大修館書店から昨年一二月に刊行した『一席二聴 落語で楽しむ古典文学』をすでに読んで授業に臨む生徒もいて、「楽しみにしていました」という声も聞くことが出来ました。これは教員冥利・作家冥利に尽きるというものです。

漢文に関してお話ししますと、やはり古文と比較しても時間の割き方はどうしても少なくなつてしまふのが現状です。センター試験以降は「二次試験に漢文が出題されないのが要りません」という生徒も多く、結局「要・不要」で括られるのが寂しいところです。それでも、中国が日本の文化に大きな影響を与えたことは歴史的な観点から間違いなく、日本人が書いた漢文（公的文书や漢詩文など）も多く存在します。そして何より、広大な中国大陸での話はダイナミックなものが多いと私は感じています。拙著で取り上げた「鴻門之会」などは登場人物も豊富で、そのまま良質なドラマとなりそうな設定です（先人達がきつとドラマ化しているでしょうけど）。人がどのように考え、どのように動いたか、そこから学べる内容は非常に濃密だと私は思います。

ですから、古文同様、漢文の学習を進めていき、生徒達にはそこから多くの感性、多くの知識を吸収してもらいたいと考えています。

おっと、チャイムが鳴りましたね。お後がよろしいようで。

どんどん

●特集Ⅱ漢文教育のあゆみと展望

〔提言〕 IT機器によつて新たな授業スタイルを模索する

ありき
大輔だいすけ

(筑波大学附属駒場高等学校)

漢文学習とICT教育は水と油の関係にあるといえよう。確かに、昨今のパソコンは漢文入力時の諸問題——例えば再読文字の左側に付ける振仮名や、四字以上の振仮名を二行にわたつて表示する方法など——も「大修館漢文エディタ」や「一太郎」の漢文ツールパレットを使うことによつて可能となつてきたが、それをパワーポイントに反映出来なかつたり、ピッチ(文字間隔)を自在にレイアウトしづらかつたりと、依然不自由さを感じている方も多いことだろう。私もこれまで物珍しさからプロジェクトや電子黒板などを試してみたが、所詮は黒板の代用に過ぎなかつたことは否めず、やはり手書きのほうが劣少く思える。しかし漢文学習にもICT教育の導入は必然の流れであれば、IT機器によつて「何が出るか」より、IT機器で「何をしたいか」を考え、そのために必要な設備やソフトを準備しなければならない。そこで一つ、IT機器を用いた授業例を提示したい。

『論語』泰伯篇「民可_レ使_レ由_レ之、不可_レ使_レ知_レ之。(民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず)」は、そのまま直

訳するとあたかも愚民政策を推奨しているようにも見えるため、今なお様々な解釈が可能である。私は次のような解釈を生徒に示し、それに則して白文「民可使由之不可使知之」に句読点と返り点を付けさせるという授業を展開した。

- ①民のうち、使える者は従わせよ。使えない者には教導して理解させよ。
- ②民が「良い。」と言えば従わせよ。民が「良くない。」と言えばその理由を理解させよ。
- ③民は従わせるべきであろうか。いや、理解させるべきである。
- ④民をこき使うことは可能であるが、これに支持させることは不可能である。その理由を理解させよ。

これらは文法的にもやや無理のある読み方であるが、生徒にとつては漢文の構造を理解させる訓練となる。この時、OneNoteやEvernoteなど複数人が同時に編集できるソフトを用い、教室内で一枚のシートを共有させてそれぞれの意見や答えを書き込ませる。こうすれば漢文読解のブレインストーミングが可能となる。イメージとしては、漢文読解の思考過程を数式の証明のように可視化するものである。

このように、IT機器を旧来の講義型の授業に対する補助的な使い方ではなく、漢文教育に協同的な「学びあい、教えあい」の形の授業スタイルを導入するためのきっかけとしたい。

*この授業の①～④の答えは二八ページに掲載しました。

●特集Ⅱ漢文教育のあゆみと展望

「提言」 古典の世界を立ち上げる

加藤 敏
(千葉大学)

小学校における古典教育が始まり、教育の方法が様々に模索されて豊かな授業実践が積み上げられてゆく段階となった。ただ、教科書に採られている教材は、古典中の古典とされる『論語』と唐詩そして故事成語がほとんどである。また中学・高校に比べ、倫理や道德の面がやや強調されているようである。『大学』の「心焉こころに在らざれば、視れども見えず……」も、意味の大体を知るだけでよいとはいえず、「精神が集中していないと、見ても何も見えず……」と訳してしまうと、「授業は集中して受けなさい」という指導が待っているように、聊か興ざめである。

小学校では子供たちが興味を抱く内容の教材を新たに開発しなくてはならない。その際、白文や書き下し文に拘らず、優れた訳詩や現代語訳も視野に入りたい。

例えば、単なる寓意を理解するレベルからその寓意を語る表現者の層まで深めることができる柳宗元「三戒」などは小・中・高でそれぞれ扱えるテキストである。

中学・高校においても、わが国の古典の名作をできるかぎ

り平易に味わえるようにするというのが、現今の古典教育の大前提である。教科書には古典の世界に誘う近代以降の文章も採られている。さらに詳細な注釈と課題など、読めば理解できる工夫が施される。加えて優れた教授者。まさに「至れり尽くせり」であるが、それでも子供たちが古典好きにならないのは、こうした努力が必ずしも古典を立ち上げることに結びつかないからであろう。わが国の古典中の古典が必ずしも「私の古典」ではないし、他人の感動は自分の感動ではない。また平易なものほど飽きやすいのが世の習いである。

古典は安易に現代と結びつけたりせず、時間をかけてゆっくりと読みたい。漢詩であれば、一つ一つの言葉に注目し、広がり深まってゆくイメージや情感を大切にしたい。杜甫「春望」であれば、「国破」とは具体的にどのような状況であったのか、語り手はどのような視座で、なぜそのような表現しているのか、を問いかけてみる。「山河在」の「山河」には、自然ではなく唐王朝の山河という意識が強く込められていることに気づけば、「山河在り」としか表現できなかった語り手の心情が急に生き生きと立ち上がってくるのではないか。こうした営みを通してしか「春望」が「私の古典」になることはない。

新たな知の姿が求められる時代、「私の古典」こそが研ぎ澄まされた言語感覚や豊かなイメージ喚起力、思考力を育んでくれるであろう。

●特集Ⅱ漢文教育のあゆみと展望

「提言」誰でもできる漢文の授業を目指して

塚田 勝郎

(筑波大学附属高等学校)

例年、教育実習生の指導で最も悩まされるのは、実習生たちの漢文の学力である。彼らは、現代文や古文に関しては一定程度の学力を有しているものの、漢文には共通して苦手意識を持っている。したがって、教育実習指導では、教科書の読みから始まり、語句や句法、現代語訳、作品の背景、現代との関わりなど、授業技術以前のことを懇切丁寧に教授することになる。実習生自身が問題意識を持ち、自分なりの解釈を持つて授業に臨むという教育実習本来の姿からは、ほど遠いと言わざるを得ない。

実習生の大多数は、高校一年生の「国語総合」の一部でしか漢文に触れていず、二、三年生で「古典」を履修した場合も、内容は専ら古文であったという。さらに大学でも、漢文関係の科目は最低の四単位しか履修していないという学生がほとんどである。これでは、高校生に漢文を指導することは不可能であろう。そして、彼らが将来教壇に立ったとしても、積極的に漢文に取り組もうとしないことは、容易に想像できる。つまり、高校・大学で漢文を学ばない↓教師になっても、

興味が持てず、自信もないので漢文には時間を割かない↓そこで学んだ生徒は、漢文の力がつかず、漢文の面白さにも気づかない、という悪循環が生まれることになる。

漢文専門の高校教師は、今や絶滅危惧種である。現に多くの高校では、国語科に漢文プロパーが皆無という実情が見られる。漢文の専門家ではない先生たちが、漢文の授業をしてみたくなるような雰囲気作りと、安心して授業に取り組める環境整備は、喫緊の課題である。そこで、誰でもできる漢文の授業を実現するための方策をいくつか提案したい。

①国語の中の漢文であることを強く意識しつつ、高校漢文の目標をより明確にする。

②面白く、学ぶ意義のある教材を増やす。小説教材も、様々な工夫をこらした上で、多く取り入れたい。

③歴史や風土と結びついた日本漢文を積極的に教材化する。

④思想分野の授業を、安易に徳育や人格形成と結びつけない。

⑤訓点付きの漢文ばかりでなく、書き下したのも教材として認め、授業の効率化を図る。

⑥書き下し文指導に要する時間のロスを解消するために、教科書では「書き下し文」と呼ばず、「読み方」に統一する。

⑦教科書ごとに異なる表記の「ゆれ」を可能な限り解消し、授業に取り組みやすくする。

旧世代の漢文教師が中心となり、関係学会や教科書出版社をも巻き込んで、議論を急ぎたい。

豊富な教材から自由に選べる

「古典B」教科書のご案内



古典B 古文編・漢文編
[5B31031]

特色

1 時代とジャンルを網羅した、充実の教材数

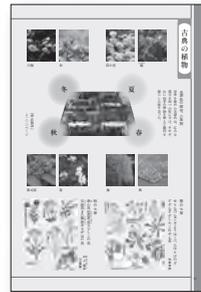
古文編、漢文編の分冊タイプとすることで、教材数を大幅に増やしました。さまざまな現場の実情に応じて、教材を自由に選び、組み合わせることができます。

2 教材に即して要点を確認できる、文法の設問

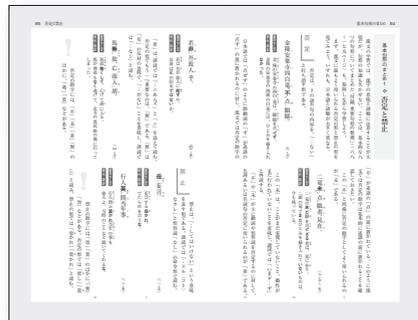
古文編では、ほぼすべての教材に「文法」の設問を設け、総合的な文法力が身につく識別の問題を中心に、確認しておきたいポイントを網羅しました。

3 教材に即して要点を確認できる、句法のまとめ

漢文編では、各教材ごとに「訓読で注意する文字」と「句法」をまとめ、重要なポイントを整理できるようにしました。さらに類出の八つの句形について用例付きで丁寧に解説したコラム「基本句形のまとめ」を掲載し、要点を随時参照できるようにしました。



古文編・漢文編とも、本文理解に必要な地図・系図などの資料のほか、絵巻・さし絵などもカラーで効果的に収録しています。



4 新しい発想でまとめた、役立つ巻頭図録

巻頭には古典の学習に有益な図録を11ページにわたり掲載。模型や写真を効果的に使い、ビジュアル世代の高校生が古典の世界を豊かにイメージできるよう工夫しました。

5 古典の理解がより深まる「古典の窓」

単元末に適宜書き下ろしコラム「古典の窓」を設け、作品・作者の魅力や文学史についての理解がより深められるようにしました。

古典の楽しさを伝える、新時代の教科書



特色

1 「古典への招待」

各単元の最初に、その単元で扱う作品の概略や魅力を、年表や図解をまじえてビジュアルに描き出した特集ページ「古典への招待」を設けました。

2 生徒を引き込む教材、斬新な教材化

教材は基本的かつ生徒の感性に訴えるものを厳選。大岡信「百人一首の恋の歌」の後に折込で全首掲載した「百人一首」、蕪村の絵と読む「奥の細道」、安野光雅の挿画が印象的な「三国志」など、教材化や見せ方にもさまざまな工夫を盛り込みました。

3 新しい発想でまとめた、役立つ巻頭図録

巻頭には古典の学習に有益な図録を11ページにわたり掲載。模型や写真を効果的に使い、ビジュアル世代の高校生が古典の世界を豊かにイメージできるように工夫しました。

その単元で扱う作品の概略や魅力を、年表や図解をまじえて描き出した「古典への招待」を設けました。

「百人一首」を美しいカラー折込で全首掲載。学習意欲を高めるためのさまざまな工夫を盛り込みました。



古典はおもしろい

古典
◆
物語選

古典A 物語選

【古A3007】A5判262ページ

特色

1 ジャンル別構成で 必要十分な教材を精選

物語作品を中心に、古典学習に必要な十分な基本的な教材を精選。単元構成はジャンル別とし、各学校の実情に応じて教科書活用の幅を広げられるようにしました。

2 「つながり」を可視化する さまざまな工夫が満載

古典に対する理解を深め、その深さとおもしろさを実感するために、年表・系図などの図解や「関連」「展開」「コーナー」を設けて、時代・作品・人物・言葉などさまざまな「つながり」を把握するための工夫を盛り込みました。

3 ビジュアルでわかりやすい 充実の資料・図録

古典学習に欠かせない資料・図録は、テーマごとに新しい発想でまとめ直し、見やすさと親しみやすさを追求しました。

古文編

一 説話

◆昔物語集 安倍晴明

◆展開 陰陽師(夢枕蓑)

宇治拾遺物語 小野篁広才のこと / 検非違使

忠明のこと

十訓抄 大江山いくの道

◆古典の窓1 おもしろい話を探そう

二 随筆

枕草子 すまじきもの / 木の花は / 中納言

参りたみて / 二月つごもりごろに / 九月

ばかり / 野分のまたの日こそ / この草子

目に見え心に思ふことを

方丈記 行く河の流れ / 安元の大火

徒然草 家居のつぎつき / 名を聞くより

／世に語り伝ふること / 今日はそのことな

さんと思へど / 丹波に出雲といふ所あり /

断章三編

◆古典の窓2 「独り居て心に浮かぶこと」

三 物語

竹取物語 かぐや姫の昇天

伊勢物語 初冠 / 月やあらぬ / 関守 / つひに

ゆく道

源氏物語 をばすて

御法 桐壺 / 若紫 / 葵 / 須磨 / 若菜上 /

◆展開 長恨歌(白居易)

◆展開 無名草子

大鏡 雲林院の菩提講 / 花山院の出家 / 道真

左遷 / 三船の才 / 鏡 / 弓 / 鶯宿梅

平家物語 忠度都落ち / 能登殿最期

◆展開 忠度

西国諸国ばなし 大晦日は合はぬ算用

雨月物語 浅茅が宿

◆古典の窓3 物語の作者像を探る

四 日記

土佐日記 阿倍仲麻呂の歌 / 白波

◆展開 哭異卿衡(李白) / 古今和歌集 / 今昔物語集

蜻蛉日記 町の小路の女

和泉式部日記 薫る香に

紫式部日記 和泉式部と清少納言

更級日記 あこがれ / 源氏の五十余巻

十六夜日記 駿河路

◆古典の窓4 自己の人生を見つめる

古典に親しむ

一 故事・逸話

春と秋―古典歳時記(久保田淳)

百人一首の恋の歌(大岡信)

百人一首

発句でたどる『奥の細道』

日本語に生きたる漢語(興膳宏)

古典名文選

二 史伝

鴻門の会 (一) 沛公項王に見ゆ

(二) 樊噲目を撞らして項王を視る

項王の最期 (一) 四面皆楚歌す

(二) 我何の面目ありて之に見えん

◆展開 鴻門の会(武田泰淳)

◆古典の窓6 司馬遷と『史記』

三 詩文

近体詩 竹里館 / 秋浦歌 / 江南春 / 春夜 / 送友人 / 月夜 / 咸陽城東樓

古体詩 桃夭 / 石壕吏

物語 定伯売兎 / 桃花源記

◆展開 古諺(采木のり子)

◆古典の窓7 漢詩について

四 思想

『孔子と門人たち』

賢哉回也(論語) 過猶不及(論語)

暴虎馮河(論語) 聞斯行諸(論語)

『人の性』

不忍人之心(孟子) 人之性善(荀子)

◆展開 性猶沸水也(孟子)

『自然への回帰』

小国寡民(老子) 曳尾於塗中(莊子)

『法治への思想』

侵官之害(韓非子)

◆古典の窓8 諸子百家

付録

文語文法要覧 古文参考年表 助字のまとめ

漢文参考年表 古典の言葉 古典の人物

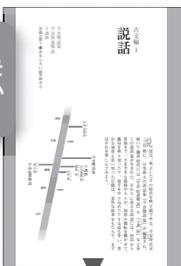
古典の舞台 古典の暮らし 古典の時間

古典の植物 京都付近図 旧国名地図 中国参考地図

「つながり」が見えると



単元扉ではリード文と略年表でそのジャンルの概略を把握するとともに、これから学ぶ作品の位置を確認。



教材は基本的なものを精選。見開きを基本に見やすく構成しました。

人名・語句など、あわせて読むと理解が深まる教材にジャンプ。

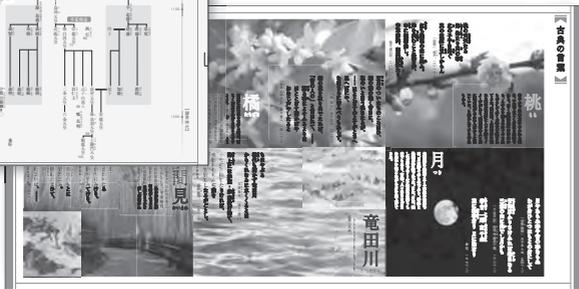
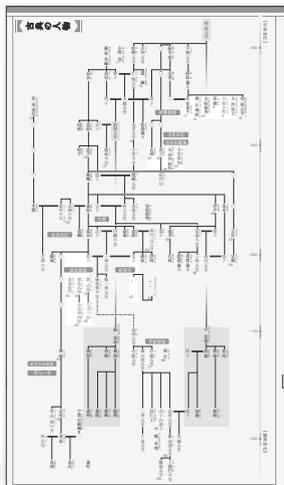
関連



展開

関連する文章や翻案など、発展的な素材を適宜掲載。

単元末には、コラム「古典の窓」。さらに学習を深める。

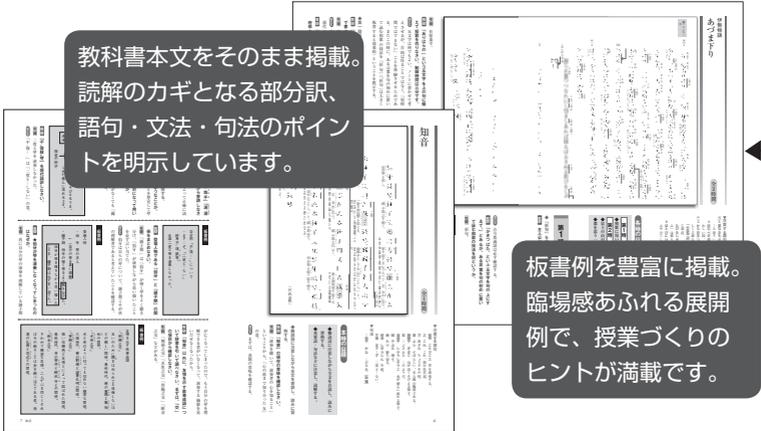


●資料・図版
現代にも生きる古典の言葉を、用例と美しい写真で見せる「古典の言葉」、古典の作品と人物を一枚の関係図でつなぎ古典文学の全体像を可視化する「古典の人物」。
このほか、テーマごとにまとめ直した図録、「百人一首」、『奥の細道』を扱った折込など、新しい工夫と発想が満載！

すぐに使える、実践的な『授業展開指導ノート』誕生。

●執筆者からのメッセージ●江川順一
 古典の世界と向き合い、その素晴らしさを教師としてどのように生徒に伝えるか。
 生徒にとつての「古典」体験は、ひょっとして高校時代の授業という機会以外にはないかもしれない……執筆中、そんな思いが絶えず頭の中にありました。
 『授業展開指導ノート』は、執筆者が主役ではありません。授業を担当する先生方に読んでもらい、その先生が、自分のことばで授業を展開してはじめて、生徒に何かを伝えることができる。
 あたかも伝言ゲームのようなものですが、私たちの「古典への思いの丈」をここに封じ籠めることで、まずは読者である先生方に「思いの丈」を注入させていたたく。それによって、全国の高校生にいくばくでも古典とのつながりを獲得してもらうことができるに違いないと確信しています。

江川順一



▲授業展開指導ノート

- 【国語総合・古典B 付属資料セット】
- 指導資料(A5判)
- ★授業展開指導ノート(B5判・2色刷)
- ★補助資料集(B5判)
- 問題集(B5判)
- 付属資料CD-ROM(2枚組)
- 【別売】
- 学習課題ノート(B5判・2色刷)
- 指導資料CD-ROM

- 執筆者紹介(古典編)
- 青木弘行(あおき・ひろゆき) 北海道大麻高等学校教諭
- 朝妻 秀(あさづま・しゅう) 北海道興部高等学校教諭
- 江川順一(えがわ・じゅんいち) 北海道興部高等学校教諭
- 立命館慶祥中学校・高等学校副校長
- 太田幸夫(おおた・ゆきお) 北海道石狩翔陽高等学校教諭
- 大屋敷全(おおやしき・たもつ) 北海道登別青嶺高等学校教諭
- 小笠原浩(おがさわら・ひろし) 立命館慶祥中学校・高等学校教諭
- 鳴海雅哉(なるみ・まさや) 函館工業高等学校准教授
- 山崎圭志(やまざき・けいじ) 北海道利尻高等学校教諭

漢文教室 200号記念 アーカイブ



▲創刊号 (1952.5)



▲第51号 (1960.11)



▲100号別冊 (1971.6)

「漢文教室」は、一九五二（昭和二七）年五月に創刊されました。

漢文教育振興の気運が高まっていた当時、小社では諸橋轍次先生を編集顧問に、中西清・鎌田正・大木春基・鈴木修次・小林信明・尾関富太郎・牛島徳次の先生方七名を編集委員とした検定教科書『高等漢文』を発行、この年が使用開始にあたっていました。

漢文教育のありかたについて、また発行教科書について、「理論と実際の両面から活発なる研究を試み、漢文教育の真のありかたを研究する」（諸橋轍次「発刊の辞」）ことを目的としてスタートしたこの小さな雑誌は、以来、多くの先生方のご指導・ご支援により、漢文教育界の動向及び最新の教材研究、授業実践等を、全国の先生方にお届けして参りました。

おかげさまをもちまして、本号で創刊二〇〇号を迎えることができました。

今後とも一層のご厚情を賜り、引き続きご指導くださいますようお願い申し上げます。

『漢文教室』総目次（一八一号〜一九五号）

■一八一号（一九九五年五月）

●特集Ⅱ21世紀の漢文のために

内容理解を第一とした漢文の指導法	谷川英則
生徒と対話する漢文教室	江川順一
繰り返し返しの語に注目した漢文の読解	前田康晴
返り点・送り仮名などの統一の方向性	江連隆
「漢文アレルギー」対策に関して	小池茂
漢文の近代化	養老孟司
孔子をコンピュータの中につくる	高橋英之
漢詩の「別れ」に作曲して	宗像和
中華飲酒詩の魅力	杵掛良彦
わかりやすい漢文理解をめざして（第2回）	畑中栄
『漢文教室』総目次（一五一号〜一七〇号）	

■一八二号（一九九六年五月）

●特集Ⅱ近体詩の指導

近体詩の指導をめぐって	加藤敏
古くて新しい音声言語の担い手	江川順一
教室で読む絶句・律詩	阿野高明
白居易の眼花の詩について	滝本正史
「文選」賦詩小考「伊勢物語」へのかかり	清常民
陶淵明と道教について	宮澤正順
わかりやすい漢文理解をめざして（最終回）	畑中栄
新刊紹介 田部井文雄『中国自然詩の系譜』	坂口三樹

頼惟勤・水谷誠編『中国古典を読むために』：山崎直樹
『漢文教室』総目次（二七一号〜一八〇号）

■一八三号（一九九七年五月）

●特集Ⅱ高校生に読ませたい漢文の名作ベスト3

人の死を見つめて	清水茂
古典の「味読」への誘い	水上静夫
論語・史記・唐詩	田部井文雄
高校生に読ませたい三つ	安居總子
私の「漢文ベストスリー」	井波律子
日本人の祖先が書いた漢文から三つ	溝上瑛
名文から生き方を学ぶ	小出貫暎
庸子	福田公明
面白い漢文	李長波
漢文を「学ぶ」贅沢を残すために	大矢マルグリット
文章教材三題	滝本正史
そつとおすすめる「文章」の新教材	阿野高明
漢詩音読の可能性	中村佳文
詳細「孫子の兵法」騒動の顛末	
新刊紹介 福島久雄『孔子の見た星空』	合田方子
江連隆『論語と孔子の事典』	加藤敏

■一八四号（一九九八年五月）

●特集Ⅱ漢文教育にまつわる「？」

訓読の習慣とその扱い	塚田勝郎
表現と文脈——疑問と反語をめぐって——	細谷美代子
「変徴の声」とはどんな音楽か	高野由紀夫

「雑説」に学ぶ意見文の書き方	加藤和江
李白「千里江陵一日還」考	平野保夫
伊勢物語と中国詩文とのかわり	清常民
新刊紹介 江川順一「最北端の漢文教室から」	藤井康弘
水上静夫「漢字文化の源流を探る」	菊地隆雄
大庭脩編著「木簡―古代からのメッセージ」	大橋修
■一八五号（一九九九年五月）	
十三世紀に開催された国際宗教会議	堀池信夫
共感を得るための『孟子』レトリックについて	前田康晴
孟子「無名之指」章段について	滝本正史
漢詩創作授業の取り組み	鈴木淳次
六朝詩文と『古今和歌集』とのかわり	清常民

井の中の漢文●養老孟司「漢文の近代化」（第一八一号、一九九五年五月）

『莊子』の「井蛙」の寓話ではないが、とかく人は狭い世界に閉じこもり、自分の価値観だけで物事を判断しがちである。漢文教育も、「井の中の漢文」に陥っていないかどうか、折にふれて点検する必要があるだろう。その意味で、他分野からの意見は貴重である。

『漢文教室』第一八一号（一九九五年）は、「21世紀の漢文のために」と題する特集を組み、異分野の三氏の漢文にまつわる文章を載せている。

- 養老孟司(解剖学)「漢文の近代化」
- 高橋英之(数学)「孔子をコンピュータの中につくる」
- 宗像和(作曲家)「漢詩の『別れ』に作曲して」

中でも養老氏は、筆鋒鋭く「漢文は近代化が遅れているのではないか」と指摘している。氏は、まず「漢文がつまらない理由」として次の二点を挙げる。

- ①『十八史略』のような面白いものを読ませないから。
- ②漢文の先生は、しばしばどうしても道学者風になりやすいから。

続いて氏は、「近代化が遅れている」具体例として、「漢文が打てるソフトがない。古典を入れたCDROMやデータベースがない。漢字の入力が面倒である。コンピュータで使える漢和辞典がまだない。」の四点を挙げるが、これらのハード面は、この二十年でほとんど解決済みである。それにもかかわらず、漢文教育の衰退が憂慮されているのは、なぜだろうか。

養老氏の主張は、現在でも傾聴に値する。氏の批判を「漢文の教え方がつまらないから漢文が衰退する」という叱咤激励の言葉と受け止め、漢文教育再興のための議論の出発点としたい。

（塚田勝郎・筑波大学附属高等学校）

「坐」の訓の論議に加わる……………劉静
新刊紹介 諏訪原研『ちよつと気の利いた漢文こぼなし集』

向島成美『漢詩のことば』……………江川順一
松浦友久編『漢詩の事典』……………大上正美
袁珂著・鈴木博訳『中国神話・伝説大事典』…村上哲見
川田秀文

■一八六号(二〇〇〇年五月)

●特集Ⅱ大漢和辞典「補巻」

「記念講演」『日本の漢字文化』わが師・諸橋轍次博士を語る

補巻の内容とその特色……………鎌田正

「エッセイ」私と『大漢和辞典』……………鎌田正

絶妙の「出会い」……………石川忠久

辞書は言葉の散歩道……………村山吉廣

漢字のある風景……………古家時雄

『大漢和総文字表』出版の奨め……………松丸道雄

漢文の位置―新学習指導要領の求めるもの―……………榎木利博

新しい漢文教材の発掘……………渡辺雅之

コミック・ジェネレーションのための漢文指導……………阿野高明

項羽の「笑い」―項羽本紀の感情表現―……………小出貫暎

新刊紹介 村山吉廣『漢学者はいかに生きたか』……………高橋良行

天野成之『漢文基本語辞典』……………川口顯弘

江連隆『諸子百家の事典』……………向島成美

■一八七号(二〇〇一年五月)

●特集Ⅲ六朝文学の世界

「六朝」という時代……………興膳宏

優美なる悲傷―六朝文学の特質―……………川合康三

六朝詩の日本古典への影響―「懷風藻」の七夕詩―……………菅野禮行

六朝の「知」……………齋藤希史

「六朝」を読む34冊……………原田直枝

六朝の詩人と故事成語……………渡辺雅之

漢文教材としての六朝文学……………加藤敏

六朝の芸術……………原田直枝

漢文お持ち帰りコーナー……………李長波

新しい漢文教材の世界……………菊地隆雄

センター試験、国語Ⅰ・Ⅱ「漢文」の出題傾向……………天野成之

全国漢文教育学会ウェブサイトの開設と今後の展望……………田口昌弘

新刊紹介 井波律子『中国幻想ものがたり』……………松家裕子

興膳宏編『六朝詩人傳』……………森野繁夫

松浦友久編『続 校注 唐詩解釈辞典(付) 歴代詩』……………興膳宏

田中有『書道故事成語辞典』……………小川博章

鎌田正『大漢和辞典と我が九十年』……………米山寅太郎

■一八八号(二〇〇二年二月)

漢文学習の第一の目標は日本語の文体・リズムの獲得にあり……………安居總子

●特集Ⅳ物語教材の魅力

小説教材の意義……………向嶋成美

「人面桃花」について……………加藤敏

「人虎伝」教材化の工夫……………高野由紀夫

「臥薪嘗胆」における授業の試み……………向高亜由美

「先ず隗より始めよ」を読む……………藤原貞子

おすすめ補助教材 怪奇な話……………渡辺雅之

学校で読む「物語」ブックガイド……………塚田勝郎

大修館 新教科書の紹介……………相田洋

投稿提言「漢文教育の必要性」……………佐竹保子

二人の游仙詩人―庾闡と郭璞……………天野成之

二〇〇二年度センター試験国語Ⅰ・Ⅱの「漢文」について……………川合康三

青木五郎・中村嘉弘編著『史記の事典』……………柚木利博

阿辻哲次『漢字のいい話』……………川越泰博

植木久行『唐詩物語』……………高木重俊

興膳宏編『六朝詩人群像』……………大谷通順

武田雅哉・林久之『中国科学幻想文学館』上・下……………

●一九九号（二〇〇三年六月）……………

「国語総合」教科書に見る訓読の「ゆれ」……………塚田勝郎

漢文の授業を再点検する……………柚木利博

「漢文嫌い」にさせないための入門期における漢字指導の工夫……………吉田茂樹

ある日の漢文教室・都立三宅高等学校―家政科一年……………鈴木民子

漢文入門ブックガイド……………塚田勝郎

漢文訓読盛行の時代―先人たちは何を素読したか……………村山吉廣

『三字経』全文（返り点・書き下し文付）……………訓読・加藤敏

二〇〇三年度センター試験国語Ⅰ・Ⅱの「漢文」について……………天野成之

諸橋轍次講師の東京帝国大学講義「宋学概説」の想い出……………近藤光男

新刊紹介 石川忠久『日本人の漢詩 風雅の過去へ』……………興膳宏

川越泰博『四字熟語歴史漫筆』……………植木久行

岡崎由美『漂泊のヒーロー―中国武俠小説への道』……………佐々木睦

村上哲見『宋詞の世界―中国近世の抒情歌曲』……………野村鮎子

哀悼 江連隆君……………田部井文雄

平成16年度用「古典」教科書……………

●一九〇号（二〇〇四年五月）……………

特集Ⅱ 諸橋轍次博士生誕二二〇年……………鎌田正

諸橋轍次博士の人と学問……………村山吉廣

諸橋轍次―その時代と学問……………紀田順一郎

諸橋轍次の著作活動―『大漢和辞典』と教養書群について……………

止軒先生の書……………田中有

止軒詩艸抄（再録）……………月洞讓

中国人民大学での諸橋轍次博士記念事業について……………李宗恵

漢学の里・諸橋轍次記念館について……………目黒悌一

諸橋轍次博士 略年譜……………

諸橋轍次博士 著作目録……………

二〇〇四年度センター試験国語Ⅰ・Ⅱの「漢文」について……………天野成之

ある日の漢文教室・同志社女子高等学校―三年選択「漢文講読」……………水谷亘

投稿「此中有真意」の解釈を巡る問題……………樋口泰裕
新刊紹介 田部井文雄編『大修館四字熟語辞典』……………
石川忠久・中西進『石川忠久 中西進の漢詩歎談』……………

高木重俊『張説―玄宗とともに翔た文人宰相』……………植木久行
志賀市子『中国のこっくりさん―扶鸞信仰と華人社会』……………加藤千恵

岸田知子『空海と中国文化』……………池平紀子
平成17年度用「古典」「古典講読」教科書紹介……………

■一九一〇号(二〇〇五年五月)

●特集Ⅱ李白と杜甫

李白と杜甫の時代―全盛と喪乱……………向嶋成美
キークワードで読む「酒」……………樋口泰裕
キークワードで読む「旅」……………村田和弘
キークワードで読む「別れ」……………安立典世
キークワードで読む「家族」……………坂口三樹
キークワードで読む「安史の乱」……………谷口真由実
キークワードで読む「自然」……………加固理一郎
李白と杜甫の評価をめぐる……………樋口泰裕
李白・杜甫関連地図……………
李白・杜甫年譜……………加固理一郎／坂口三樹
教材としての李白と杜甫……………加藤敏
【李白と杜甫】ブックガイド……………村田和弘
ある日の漢文教室・岩手県立不来方高等学校……………
―普通科・理数学系二年……………菅原恵子

投稿 日本文学と漢詩「酒」を中心に……………江口孝夫
二〇〇五年度センター試験国語Ⅰ・Ⅱの「漢文」について……………天野成之

鎌田正・米山寅太郎『新漢語林』……………塘耕次
野村茂夫『千字文を読み解く』……………齊藤大紀
東田雅博『纏足の発見―ある英国女性と清末の中国』……………垣内智之
野口鐵郎・田中文雄『道教の神々と祭り』……………
松枝到『アジアとはなにか』……………四日市泰博
平成18年度用「古典」「古典講読」教科書紹介……………

■一九二〇号(二〇〇六年五月)

●特集Ⅱ「史記」を「読む」

日本における『史記』の受容―「四面楚歌」のくだりをめぐって……………青木五郎
『史記』の現代性……………安藤信廣
『史記』における「述べて作らず」について……………寺門日出男
「荆軻」を読む……………中村陸子
『史記』の世界を「実感」するための試み……………江見雅志
写真で見る漢楚の興亡……………渡辺雅之
英雄の残像―唐詩の中の項羽……………加藤敏
『史記』の故事成語―秦末漢初に限定して……………渡辺雅之
『史記』を読むための文献案内……………吉原英夫
虞美人―太史公その死を紀さず……………高野由紀夫
聶栄―その姉も亦た烈女なり……………高野由紀夫
ある日の漢文教室・茨城県立土浦第一高等学校―普通科三年(古典)……………清水智恵
二〇〇六年度センター試験国語の「漢文」について……………天野成之

漢文デジタル事情(第一回) 塚田勝郎
田部井文雄編『漢文教育の諸相―研究と教育の視座から』 大上正美

高橋忠彦・高橋久子『日本の古辞書―序文・跋文を読む』 紀田順一郎

若林力『江戸川柳で愉しむ中国の故事』 渡辺雅之
平成19年度用教科書紹介

■一九三号(二〇〇七年五月)

●特集Ⅱ諸子百家の思想

諸子百家とは何か 浅野裕一

諸子百家の思想 謡口明

道家の儒家批判 渡辺雅之

法家の儒家批判―韓非子の思想 加藤和江

墨家の思想―儒家との対比から 菅本大二

百家争鳴の時代―縦横家、名家、兵家を中心に 塚田勝郎

諸子百家の可能性 安藤信廣

諸子百家の故事成語―『大修館四字熟語辞典』から 塚田勝郎

諸子百家の思想ブックガイド 塚田勝郎

◎『精選古典 改訂版』新教材紹介

「逸話と寓話」について 渡辺雅之

珠玉の古典小説―「定伯売鬼」と「定婚店」 加藤敏

二〇〇七年度センター試験国語の「漢文」について 天野成之

漢文デジタル事情(第2回) 塚田勝郎

「諸橋轍次博士と『大漢和辞典』展」について 末岡実

新刊紹介 卯和順『論語 珠玉の三十章』 三田村圭子

館野正美『老荘の思想を読む』

江川順一

庄魯迅『李白と杜甫 漂泊の生涯』 江川順一

■一九四号(二〇〇八年五月)

●特集Ⅱ二次からの漢文指導

平成20年度用『精選古典 改訂版』紹介 渡辺雅之

二次次からの漢文指導 渡辺雅之

人物理解に重点を置いた史伝の授業 高野由紀夫

―「読破」という達成感を得させる授業 菊地隆雄

志怪・伝奇小説から漢文世界へ 陶淵明の詩文―「帰去来辞」から「飲酒」其五、そして「桃花源記」へ

論説文の指導―「考え味わう漢文の授業」をめざして 安立典世

〔コラム〕漢文訓読Q&A 塚田勝郎

◎『新編古典 改訂版』新教材紹介

唐代伝奇「枕中記」をめぐる 向嶋成美

平成21年度用『新編古典 改訂版』紹介 塚田勝郎

【追悼・米山寅太郎先生】 田部井文雄

哀悼 米山寅太郎先生 小川裕充

漢学者 米山寅太郎先生 小川裕充

略年譜／著作・共編 小川裕充

「長恨歌」構成論序説―「魂魄不曾來入夢」の句の解釈をめぐる 坂口三樹

世紀を超えた友情―鎌田正先生著「忠孝両全の黒木典雄学士を偲ぶ」紹介 田山泰三

二〇〇八年度センター試験国語の「漢文」について 天野成之

新刊紹介 杉原たく哉『天狗はどこから来たか』 松枝到

東田正博『柳模様の世界史―大英帝国と中国の幻影』 杉本淑彦

..... 杉本淑彦

●一九五号（二〇〇九年五月）

●特集Ⅱ「三国志」の世界

「三国志」の世界	渡邊義浩
【魏】曹操と官渡の戦い	仙石知子
【呉】戦略家としての魯粛	高橋康浩
【蜀】劉備という英雄	池田雅典
三国時代の詩人と文学	安藤信廣
教材としての「三国志」―「十八史略」を用いた授業	高野由紀夫

三国志にまつわる故事成語	田中靖彦
三国志関連年表	田中靖彦
唐詩に揺曳する「三国志」の残影	坂口三樹
三国志に親しむための文献紹介	田中靖彦
【追悼】鎌田正先生	田部井文雄
哀悼 鎌田正先生	田部井文雄
鎌田先生の思い出	大竹修一
略年譜／著作一覧	大竹修一

二〇〇九年度センター試験国語の「漢文」について	天野成之
漢文デジタル事情（第3回）	塚田勝郎
新学習指導要領でどう変わる 漢文編	塚田勝郎
新刊紹介 諏訪原研『四字熟語で読む論語』	加藤和江
山田敬三『魯迅―自覚なき実存』	藤井良雄
平成21年度用「古典」「古典講読」教科書紹介	藤井良雄

◆編集部より

○編集部宛に、こんなお問い合わせをいただいたことがあります。「高等学校時代の漢文の授業で読んだ話に、ぜひとももう一度読みたいものがある。題名も作者も思い出せないが、何でも主人公が舟で見知らぬ外国に流れ着いた見聞を誌した物語で、美しい風景描写と、異文化に触れた驚きがいまも忘れられない……」。

○中国古典にそんな大漂流記があったかしらん、と耳を傾けているうちに、「外国」「外人」という言葉にピンと来ました。武陵の一漁師が、桃林の奥に小さな洞穴を見つけ、その穴をくぐり抜けたとき、目の前から開けた風景――「其の中に往來種作する男女の衣者、悉く外人のごとし」。六朝の詩人・陶潜の「桃花源記」、昔も今も人気のある教材の一つです。

○本誌第四五号（一九五九・一月）掲載の「海知義氏「外人考」―「桃花源記」源記瑣記」は、「桃花源記」中に三度現れる「外人」の語の解釈をめぐる論考で、お問い合わせ件数ナンバーワン。この論考に触発された寄稿も数多くあり、第一八〇号（一九五五・二月）掲載の坂口三樹氏「桃花源記」「外人」贅説」に至るまで、活発な誌上論議を巻き起こしています。過去に小誌に掲載された記事の中で、印象深いもの、意義深いものについてご紹介ください。四〇〇字×一〜二枚（二五字×三二行）程度。（都合により掲載できないこともあります。御了承ください。）

*12ページの答え

- ①民可レ使、由レ之。不レ可レ使、知レ之。
- ②「民の使ふべきものは、之に由らしめよ。使ふべからざるものは、之を知らしめよ。」
- ③「民」可レ使、由レ之。「不可」使、知レ之。
- ④「民」可なり。「といふものは、之に由らしめよ。」「不可なり。」といふものは、之を知らしめよ。
- ⑤「民」可レ使、由レ之。不、可レ使、知レ之。
- ⑥「民は之に由らしむべきか？ 不、之を知らしむべし。」
- ⑦「民」可なり。「といふものは、之に由らしめよ。」「不可なり。」といふものは、之を知らしめよ。
- ⑧「民」可レ使、由レ之。不、可レ使、知レ之。
- ⑨「民は之に由らしむべきか？ 不、之を知らしむべし。」
- ⑩「民」可なり。「といふものは、之に由らしめよ。」「不可なり。」といふものは、之を知らしめよ。

〈鴻門の会〉にみる『史記』の文体的特徴（下）

——『漢書』との比較から

坂^{さか} 口^{ぐち} 三^み 樹^き

（文教大学）

四

樊噲の活躍により危機を逃れた沛公は、廁に立つとそのまま酒宴の場を抜け出し、樊噲等わずか四人の供回りに警護されて覇上の自軍に逃げ戻る。次に、この沛公脱出の場面を取り上げて、『史記』と『漢書』の記述を比較することしよう（本文対照表「四 沛公脱出の場面」参照）。この場面は、沛公が項羽の軍門を脱出するまでの経緯を述べる部分と、沛公を取り逃がした范増の憤怒のさまを描く部分とからなっている。まず前者について見れば、『史記』では沛公や樊噲・張良の発話描写が、『漢書』に比して極めて豊富に含まれている点が注意される。項羽に辞去の挨拶をしなかつたことを気に病む沛公の「爲レ之奈^な何。（之を為すこと奈何。）」との問いに対し、樊噲は当時の俗諺と思われる「大行不^レ顧^レ細謹^ニ、大禮不^レ辭^ニ小讓^一。（大行は細謹を顧みず、大札は小讓を辭せず。）」を用いて沛公の心配を払拭し、さらに「如今人方爲^ニ刀俎^一、我爲^ニ魚肉^一。（如今人は方に刀俎たり、我は魚肉たり。）」との卑俗な譬えで自分たちの置かれている状況を示して、急ぎ脱出

するよう沛公を促す。脱出に向けての一刻を争う緊迫した場面の展開が、主従の間答を通じて活写される。また、張良の発話描写に目を移せば、沛公に代わって項羽への贈り物を献上するよう依頼された張良の「謹諾。（謹みて諾す。）」の一言も、その冷静沈着な人柄を伝えて効果的であるし、贈り物を献上する際の謝罪の部分では「謹」「臣良」「再拜」「大王足下」「大將軍足下」等の語を動員して最大級の改まり畏まった態度を示しながら、項羽に沛公の所在を尋ねられるや、項羽の意図に気づいてすでにこの場を逃れた事実を明かし、追っても無駄だといわんばかりに「已^レ至^レ軍矣。（已に軍に至らん。）」といい放つなどは、張良の豪胆な一面を浮かび上がらせて誠に効果的である。『漢書』のごとく前半の謝罪の言葉が欠き、後半の事実を明かす部分も「閒至^レ軍。故使^ニ臣獻^レ璧。（間かに軍に至る。故に臣をして璧を獻ぜしむ。）」と説明的な表現に改めてしまつては、張良の態度の変化が判然とせず、したがってその豪胆さも希薄になつてしまふ。

さらに、その張良への指示として発せられた沛公の「從^ニ此道^一至^ニ吾軍^一、不^レ過^ニ二十里^一耳。度^ニ我至^ニ軍中^一、公乃入。（此の道

より吾が軍に至らば、二十里に過ぎざるのみ。我の軍中に至るを度りて、公乃ち入れ。」という発話にも注目すべきであろう。ここからは、一見頼りなげに見えながら、生き延びるためには細心の注意を怠らない、意外にしたたかな沛公の性格が窺えよう。『史記』の発話描写には、単に事態の経過を示すだけでなく、そこに登場人物の性格や心の動きまでも浮かび上がらせて、場面を生き生きと立体的に描き出す効果が認められるのである。

ところが『漢書』『高帝紀』『樊噲伝』では、沛公が樊噲等四人に警護されて間道から自軍に逃げ帰り、張良一人が謝罪のために残ったことが簡潔に説明されるのみで、主従の間答はすべて省略されており、『史記』のような臨場性や人物像のふくらみは求むべくもない。

次に、後者の范増の怒りを描く場面について見るならば、『史記』では沛公を取り逃がした范増の反応が、項羽の反応と対比的に描かれている点が興味深い。沛公からの贈り物である「白璧」を「坐上」に置いた項羽に対し、范増は贈り物の「玉斗」を「地」に置き、剣で撞き砕いてしまう。この「置之地」(之を地に置き)という細かな描写が、「唉、豎子不_レ足_二與_一謀」(唉、豎子_と謀るに足らず)という吐き棄てるような言葉と相俟つて、范増の怒りの激しさを端的に物語る。「羽受_レ之。(羽之を受く)。「増怒、撞_二其斗_一(増怒り、其の斗を撞き)」とあるばかりで、それをどこに置いたかの描写を欠き、「豎子不_レ足_二與_一謀」の罵言をも省略した『漢書』の記述では、残念ながらその怒りの激しさが、『史記』ほどには読者に強く迫ってこない。

なお、『史記』では、両陣営の距離や沛公の逃げた間道のルー

トが、「四十里」「二十里」といった数字や「酈山」「芷陽」などの地名を挙げてこと細かに示されていることも注目されよう。こうした具体的な数字や地名は、話にリアティーを与えるのに極めて有効である。このような具体的な数字や地名があつたからこそ、沛公の命からがらの脱出劇が迫真性をもって読者にも感得されるのである。

五

以上、『史記』項羽本紀の〈鴻門の会〉の記述と『漢書』のそれとを比較・検討することで、『史記』の文体的特徴が、発話描写の多用・細部にわたること細かな描写・反復表現の頻出等の点にあることが確認された。

ところで、『史記』の文体のこうした特徴は、いったい何に由来するのであろうか。これについては、夙に宮崎市定「身振りと文学」(『中国文学報』第二十冊、一九五)に指摘がある。宮崎は「項羽本紀」の〈鴻門の会〉の一節を、「これは全段が身振りを伴って話された語り物であつたにちがいない。」とし、都市の「市」で長老等によって観衆の前で語られたものを、司馬遷が書き取つたのであると推定する。確かに、豊富な会話や細部にわたる場面の描写、さらに反復表現の頻出といった特徴は、『史記』の文体の背後に語り物の影響があつたことを窺わせる。しかしながら、これまで見てきた〈鴻門の会〉の文体的特徴が、すべて語り物から直接にもたらされたものであると断ずるには、聊かのためらいを覚える。というのも、司馬遷が『史記』項羽本紀を書くにあたって参考にしたとされる『楚漢春秋』(前漢・陸賈撰)との比較

が、まずはなされねばならないと考えるからである。⁽¹⁰⁾ 漢初の弁士で儒学をもって沛公に仕えた陸賈（生没年未詳）の『楚漢春秋』は、残念ながら現在散佚して断片的な佚文がわずかに諸書に引かれるのみであるが、今、その中から数条を掲げて、『史記』項羽本紀の記述との比較を試みよう。

〔①鴻門の会の前日、范増が項羽に沛公への総攻撃を進言する場面〕

亞父謀曰、「吾望沛公、其氣衝天、五色相糝、或似龍、或似蛇、或似虎、或似雲、或似人。此非二人臣之氣也。」
（『太平御覽』卷十五所引）

亞父謀りて曰はく、「吾沛公を望むに、其の氣天を衝き、五色相糝はりて、或いは龍に似、或いは蛇に似、或いは虎に似、或いは雲に似、或いは人に似たり。此れ人臣の氣に非ざるなり。」と。

范増説項羽曰、「沛公居山東二時、貪於財貨、好美姫。今入關、財物無所レ取、婦女無所レ幸。此其志不レ在レ小。吾令三人望其氣、皆爲龍虎、成五采。此天子氣也。急擊勿レ失。」（『史記』項羽本紀）

范増 項羽に説きて曰はく、「沛公 山東に居りし時、財貨を貪り、美姫を好めり。今 関に入りて、財物 取る所無く、婦女 幸する所無し。此れ其の志 小に在らず。吾人をして其の氣を望ましむるに、皆 龍虎と爲り、五采を成す。此れ天子の氣なり。急ぎ撃ちて失ふこと勿かれ。」と。

〔②樊噲闖入の場面〕

* 『史記』項羽本紀の記述は本文対照表「三」の当該箇所を参照。

高祖會項羽。范増目レ羽、羽不レ應。樊噲杖レ盾撞レ入、食二豕肩於此。羽壯レ之。（『水經注』卷十九「渭水注」所引）

高祖 項羽に會す。范増 羽に目するも、羽 応ぜず。樊噲 盾を杖つきて人を撞きて入り、豕肩を此に食らふ。羽之を壯とす。

〔③沛公脱出の場面〕

* 『史記』項羽本紀の記述は本文対照表「四」の当該箇所を参照。

沛公脱身鴻門、從二間道二至レ軍。張良・韓信乃調三項王軍門一曰、「沛公使下臣奉二白璧一雙、獻二大王足下一、玉斗一雙、獻二大將軍足下。」亞父受二玉斗一、置レ地、戟撞破レ之。（『太平御覽』卷三百五十二所引）

沛公 身を鴻門に脱し、間道より軍に至る。張良・韓信乃ち項王に軍門に調して曰はく、「沛公 臣をして白璧二雙を奉じ、大王の足下に獻じ、玉斗一雙をば、大將軍の足下に獻ぜしむ。」と。亞父 玉斗を受け、地に置き、戟もて撞きて之を破る。

〔④広武の戦いの場面〕

項王爲二高閣一、置二太公於上、告二漢王二曰、「今不二急下、吾烹二太公。」漢王曰、「吾與二項王一約爲二兄弟、吾翁即汝翁。若烹二汝翁、幸分二我一杯羹。」（『太平御覽』卷百八十四所引）

項王 高閣を爲り、太公を上置き、漢王に告げて曰はく、「今急ぎ下らざんば、吾 太公を烹ん。」と。漢王曰はく、「吾と項王とは約して兄弟と為れば、吾が翁は即ち汝が翁なり。若し汝が翁を烹ば、幸はくは我に一杯の羹を分けて。」と。

項王患レ之、爲二高俎一、置二太公其上、告二漢王二曰、「今不二急下、吾烹二太公。」漢王曰、「吾與二項羽一俱北面受二命懷王、曰三『約爲二兄弟』、吾翁即若翁。必欲烹二而翁、則幸分二我一杯羹。」

『史記』項羽本紀

項王之を患へ、高祖を為り、太公を其の上に置き、漢王に告げて曰はく、「今急ぎ下らざれば、吾太公を烹ん。」と。漢王曰はく、「吾と項羽とは俱に北面して命を懷王に受け、『約して兄弟と為らん。』と曰へば、吾が翁は即ち君が翁なり。必ず而が翁を烹んと欲せば、則ち幸はくは我に一栢の羹を分かつて。」と。

右に示した四条のうち、①③④には多少の字句や表現の相違はあるものの、両者に大きな記述の違いはない。①と③には『史記』にあつて『楚漢春秋』にはない記述も含まれるが、それらの多くは類書が節略して引用したために起きた相違と考えてよいであろう。むしろ③の『楚漢春秋』に「置_レ地」の表現が見えることは、『史記』が『楚漢春秋』の記述を襲つて書かれて見えることを強く窺わせもする。しかし、②の『史記』の記述のみは、『楚漢春秋』には見えない話柄や描写が大量に含まれており、両者の記述の間には大きな径庭が存する。司馬遷は、『楚漢春秋』に見えない話柄や描写を、いったい何によつて補つたのであろうか。その問いに対する答えを与えてくれるのは、『史記』樊鄴灌灌伝の論贊に見える次の一文である。

太史公曰、「吾適_二豊・沛_一問_二其遺老_一、觀_三蕭・曹・樊・噲・滕公之家_一、及_二其素_一。異哉所_レ聞。……余與_二他廣_一通、爲言_二高祖功臣之興時_一、若_レ此云。〔『史記』樊鄴灌灌伝贊〕

太史公曰はく、「吾豊・沛に適きて其の遺老に問ひ、蕭・曹・樊噲・滕公の家を觀て、其の素に及ぶ。異なるかな聞く所。……余他広と通ずれば、爲に高祖の功臣の興る時を言

ふこと、此のごとしと云ふ。

司馬遷のために「高祖の功臣の興る時」のことを語つた「他広」とは、他ならぬ樊噲の孫にあたる人物である。樊他広は、恐らく自家に伝わる祖父樊噲の活躍の伝承を、司馬遷のために詳細に語つたのであつたらう。司馬遷が『史記』の執筆にあたって、文献資料ばかりでなく口碑・口伝をも参考にしたことはよく知られているが、右の一文は、〈鴻門の會〉の記述にもそれが生かされていることを窺わせるのに十分である。それは同じ語りでも、宮崎の推定するような、市場での觀衆相手の身振りを伴つた語り物とはやや異なるのではなからうか。

では、反復表現の多用についてはどう理由が考えられるか。これも、語り物の特徴としてそれで事足りるかといえは、問題はそれほど簡単ではない。というのも、すでに田中謙二『史記』における表現の反覆（『東方学報 京都』第二十七冊、一九五七）が指摘するように、司馬遷が列伝における人物なりテーマなりを強調せんがために、意図的に用いた表現であると解することも可能だからである。少なくとも『史記』項羽本紀に関する限り、その文体の由来は宮崎が想定するよりも、事情はもう少し複雑である。恐らく『史記』項羽本紀の精彩に富んだ文体は、『楚漢春秋』の記述を基本としながら、口碑・口伝による話柄や描写を加え、さらに反復表現を意図的に持ち込むことによつてもたらされたものではなかつたか。

結び

以上、『史記』項羽本紀と『漢書』の〈鴻門の會〉の記述を比

較すること、『史記』と『漢書』がそれぞれどのような文体を志向していたかは、ほぼ明らかになったであろう。また、『史記』の文体の由つて来たるところについても、不十分ながら考察を試みた。出来事最終的な帰結を簡潔に記すことを目指した『漢書』に対し、『史記』はその精彩に富む独特の文体によって、場面を臨場感豊かに描き出すことに意を注いだ。言い換えれば、『漢書』が「何が」あつたのかを記す記録性を重視したのに対し、『史記』は「何が」と同時に、それが「どのように」あつたのかを描くことで、歴史上のひとこまを、読者があたかもその場にいるかのような迫真性をもつて描き出したのである。後世、『史記』の文章が単なる史書の域を越えて、歴史文学の称をもつて呼ばれる所以もまた、かかる点にこそ求められるであろう。

注(10) 『史記』項羽本紀が『楚漢春秋』に拠つて書かれたであろうことについては、すでに多くの指摘がある。例えば、古くは後漢・班固『漢書』卷六十二「司馬遷伝贊」に、「故司馬遷據左氏・國語、采二世本・戰國策、述二楚漢春秋、接二其後事、訖三天漢。」故に司馬遷は左氏・國語に拠り、世本・戰國策を採り、楚漢春秋を述べ、其の後事を接ぎて天漢に訖ぶ。」⁽¹⁾ といひ、唐・劉知幾『史通』卷十六「雜說上篇」には「案劉氏初興、書唯陸賈而一已。子長述二楚・漢之事、專據三此書。(案ずるに劉氏初めて興こるや、書は唯だ陸賈のみ。子長〔司馬遷の字〕楚・漢の事を述ぶるに、専ら此の書に拠る。)」との指摘が見える。なお、『史記』(鴻門の会)と『楚漢春秋』との関係を考察した論考に、寺門日出男『史記』(鴻門の会)について(田部井文雄編『漢文教育の諸相―研究と教育の視座から―大修館書店、二〇〇五)がある。また、佐竹靖彦『劉邦』(中央公論新社、二〇〇五)及び『項羽』(同前、二〇一〇)には、高祖劉邦に対する宮中での御前講義に

由来する『新語』から、楚漢戦争の部分を取り出してなつたのが『楚漢春秋』であると推定し、そこでの巧妙な歴史の書き換えの結果、実際には劉邦の項羽への降伏の儀式であつた鴻門での対面が、劉邦の項羽への謝罪・弁明のための会見として記述されたとの興味深い見解が示されている。

(11) 『楚漢春秋』の佚文は、王利器撰『新語校注』(新編諸子集成・中華書局、一九六)に「附録二 楚漢春秋佚文」として輯められている。

(12) ①の佚文は『太平御覽』卷八十七にも引かれているが、卷十五所引のものと比較すれば、類書による節略の痕跡も知ることが出来る。以下に、卷八十七所引の佚文を示す。「項王在鴻門、而亞父諫曰、『吾使三人望沛公、其氣衝天、五彩相糺、或似雲、或似龍、或似人。此非人臣之氣也。不若殺之。』項王鴻門に在り、而して亞父諫めて曰はく、『吾人をして沛公を望ましむるに、其の氣天を衝き、五彩相糺はりて、或いは雲に似、或いは龍に似、或いは人に似たり。此れ人臣の氣に非ざるなり。之を殺すに若かず。』と。」(『太平御覽』卷八十七所引)

(13) 同様の指摘は、青木五郎「史記」教材の扱い方―「漢楚の興亡」を中心にして―(『漢文教室』第一―三号、一七五)にも見える。ここでは、『史記』に頻出する反復表現について、「時にはテーマを強調し、その展開を読者に印象づけるために意図的に用いられた司馬遷の手法と考えるべきであろう。」と述べ(鴻門の会)の項莊の劍舞の場面などを例として取り上げている。

『史記』項羽本紀

四、沛公脱出の場合

沛公已出。項王使都尉陳平召沛公。沛公曰：「今者出未辭也。爲之奈何？」樊噲曰：「大行不顧細謹，大禮不辭小讓。如今人方爲刀俎，我爲魚肉。何辭爲？」於是遂去。乃令張良留。謝曰：「大王來何操？」曰：「我持白璧一雙、欲獻項王，玉斗一雙欲與亞父。會其怒，不敢獻。公爲我獻之。」張良曰：「謹諾。」當是時，項王軍在鴻門下，沛公軍在霸上，相去四十里。沛公則置車騎，脫身獨騎，與樊噲、夏侯嬰、靳彊、紀信等四人持劍盾步走上，從酈山下，道芷陽間行。沛公謂張良曰：「從此道至吾軍，不過二十里耳。度我至軍中，公乃入。」沛公已去，間至軍中，張良入謝曰：「沛公不勝桮杓，不能辭。謹使臣良奉白璧一雙、再拜獻大王足下，玉斗一雙、再拜奉大將軍足下。」項王曰：「沛公安在？」良曰：「聞大王有意督過之，脫身獨去，已至軍矣。」項王則受璧，置之坐上。亞父受玉斗，置之地，拔劍撞而破之，曰：「唉，豎子不足與謀，奪項王天下者，必沛公也。吾屬今爲之虜矣。」沛公至軍，立誅殺曹無傷。

沛公已出づるに、項王都尉陳平を以て沛公を召さしむ。沛公曰はく、「今者出づるに、未だ辭せざるなり。之を爲すこと奈何。」樊噲曰はく、「大行は細謹を顧みず、大札は小讓を辭せず。如今人は方に刀俎たり、我は魚肉たり。何ぞ辭するを爲さん」と。是に於て遂に去る。乃ち張良をして留まり謝せしむ。良問ひて曰はく、「大王來たるとき何をか操れる」と。曰はく、「我白璧一雙を持し、項王に獻ぜん」と欲し、玉斗一雙をば、亜父に与へんと欲せしも、其の怒りに會ひて、敢へて獻せざりき。公我が爲に之を獻せよ」と。張良曰はく、「謹みて諾す」と。是の時に當りて、項王の軍は鴻門の下に在り、沛公の軍は霸上に在り、相去ること四十里なり。沛公則ち車騎を置き、身を脱して独り騎し、樊噲・夏侯嬰・靳彊・紀信等四人の劍と盾を持して歩走せるものと、酈山の下のより、芷陽に道して間行す。沛公張良に謂ひて曰はく、「此の道より吾が軍に至らば、二十里に過ぎざるのみ。我の軍中に至るを度りて、公乃ち入れ」と。沛公已に去り、間かに軍中に至れば、張良入りて謝して曰はく、「沛公桮杓に勝へず、辭する能はず。謹みて臣良をして白璧一雙を奉じ、再拜して大王の足下に獻じ、玉斗一雙をば、再拜して大將軍の足下に奉ぜしむ」と。項王曰はく、「沛公安くにか在る」と。良曰はく、「大王之を督過するに意有り」と聞き、身を脱して独り去れり、已に軍に至らん」と。項王則ち璧を受け、之を坐上に置く。亜父玉斗を受け、之を地に置き、劍を抜きて撞きて之を破りて曰はく、「唉、豎子、与に謀るに足らず。項王の天下を奪ふ者は、必ず沛公ならん。吾が属今に之が虜と爲らん」と。沛公軍に至り、立ちどころに曹無傷を誅殺す。

『漢書』高帝紀・樊噲伝

（有）頃沛公起如廁，招樊噲出。置車官屬，獨騎與樊噲、靳彊、膝公、紀成步從，從間道走軍，使張良留謝羽。羽問沛公安在，曰：「聞將軍有意督過之，脫身去，間至軍。故使臣獻璧。」羽受之，又獻玉斗。范增怒，撞其斗，起曰：「吾屬今爲沛公虜矣。」（高帝紀）

（頃）有りて、沛公起て廁に如き、樊噲を招きて出づ。車官の属を置き、独り騎し、樊噲・靳彊・膝公・紀成の歩せるものと、間道より軍に走り、張良をして留まりて羽に謝せしむ。羽問ふらく、「沛公安くにか在る」と。曰はく、「將軍を督過するに意有り」と聞き、身を脱して去り、間かに軍に至る。故に臣をして璧を獻せしむ」と。羽之を受く。又玉斗を范増に獻す。范増怒り、其の斗を撞き、起ちて曰はく、「吾が属今に沛公が虜と爲らん」と。

既出沛公留車騎，獨騎馬，噲等四人步從，從山下走歸霸上軍，而使張良謝項羽。羽亦因遂已，無誅沛公之心。是日微下樊噲奔入營，譙讓項羽，沛公幾殆。（樊噲伝）

既に出づるに、沛公車騎を留め、独り馬に騎り、噲等四人歩して從ひ、山下より走りて霸上の軍に帰り、而して張良をして項羽に謝せしむ。羽も亦た因りて遂に已め、沛公を誅するの心無し。是の日樊噲營に奔入して項羽を譙讓すること微かりせば、沛公幾んど殆ふからん。

二〇一四年度センター試験の漢文について

諏訪原研
(河合塾)

概要

今年の問題文は明代の文人陸樹声りくじゆせいの『陸文定公集』から採った文章で、昨年、一昨年と同じ随筆文でした。

内容は、同じ筍でもおいしいものは食べられて命を失い、まずい筍は食べられずに生き残る、そこに莊子の「無用の用」の考えに通じるものがあるとするものでした。筍と哲学的な莊子の思想とがどう結びつくのか、そこを読み取ることが本文読解のカギになります。

本文の総字数は一八四字で、昨年より一四字、一昨年より三二字減少し、ここ二年、二〇〇字を下回っています。設問数は昨年より一問減って七問に、マーク数も一個減って八個になりました。ただ、三年前まで長らく続いていた設問数六の状態から言えば、まだ一問多いことになりました。

設問内容を見ると、問1では従前の漢字の意味を問う形式に戻りました。また、文中の空欄補充問題が復活し、本文の段落分けの問題も五年ぶりに出題されました。ほかは訓読、

解釈、趣旨に関する問題で、全体としてオーソドックスな設問だったと言えるでしょう。

設問の解説

【問1】傍線部(1)「習」、(2)「尚」の意味の問題。

(1)「習」は、前後の文脈から答えは容易にわかります。河合塾の受験生答案追跡調査によると、正答率は実に86%で、全問中最高の出来でした。(2)「尚」は、下に「甘キヤ」という目的語を伴っているので、ここは動詞的用法で、「たふとぶ」と読み、「尊重する」という意味です。正答率は43%と、あまりよくありませんでした。

【問2】傍線部Aの返り点の付け方とその読み方の問題。

手掛かりになる句形や再読文字がないので、文脈から解くしかありません。「目」(目めす)や「不レ斬二方長一」(方まさに長ずるを斬らず)の読み方から選択肢を②③⑤に絞り込み、その中で文脈に最適のものを選ぶという手順になります。結局、「くするに…を以てす」という倒置構文が決め手になるわけ

【問題文】

江南多^シ竹。其人⁽¹⁾習^ニ於^テ食^ヲ筍^ヲ。每^レ方^ニ二^ニ春^ノ時^ニ、苞^ヲ甲^ヲ出^テ土^{ヨリ}、頭^角繭^ヲ栗^ヲ、率^以供^ニ採^ス食^ニ。或^ハ蒸^シ瀾^以爲^シ湯[、]茹^介茶[、]菹^以充^レ饋^ニ。好^シ事^者目^以清^嗜不^斲方^長。故^雖園^林豊^美、複^垣重^厠主^人居^嘗愛^護及^其甘^ニ於^テ食^レ之^也、剪^伐不^顧。独^其味^苦而^不入^ニ食^品者[、]筍^常全^レ。每^当溪^谷巖^陸之^間、散^漫於^地而^不取^者、必^棄於^Ⅰ者^也。而^Ⅱ者^至取^レ之[、]或^盡其^類。然^Ⅲ者^近自^戕。而^Ⅳ者^雖棄[、]猶^免於^剪伐^{。天}物^類尚^甘而^苦者^得全^{。世}莫^不貴^取賤^棄也。然^亦知^三取^者之^不幸[、]而^偶幸^ニ於^棄者^{。豈}莊^子所^謂以^無用^為用^者比^耶。

(陸樹声『陸文定公集』による)

ですが、受験生にはあまり馴染みのない読み方であり、非常に難しかったと思われます。正答率は30%という低さでした。

【問3】空欄補充問題。

「苦」(がいに)、「甘」(おいしい)のどちらが入るかを考える問題ですが、二つの接続語(逆接の「而」と順接の「然」)がポイントになります。空欄ⅠとⅡの間は逆接、ⅡとⅢの間は順接、ⅢとⅣの間は逆接の語がそれぞれ入っていますからこれらを満たす組み合わせは①と②しかありません。あとは文脈を考えると答えはおのずと出てくるでしょう。正答率は62%で、全問中二番目の高率でした。

【問4】傍線部Bの解釈問題。

「猶」には返り点が付いているので再読文字で、「ちようど」と同じだ」と訳します。答えは簡単に⑤と決まりますが、正答率は57%に止まりました。これは再読文字の用法を知らなかったことがその要因でしょうが、正解文そのものが前後の文脈にピッタリはまらなかったのも一因でしょう。ここの「猶」は、「雖^モA、猶^ホB」(Aだけでも、それでもまだB)という構文の副詞的用法にとった方が、すっきり文意が通ると思われます。

【問5】傍線部Cの書き下し文の問題。

「莫不」は、「〜ざるは莫し」と読む二重否定形なので、選択肢は①と③に絞られます。①はスッキリした読みで正解

らしく見えますが、意味を考えると、「取るのを貴び、棄てるのを賤しむ」となり、本文の論旨である「貴ぶものを取り、賤しむものを棄てる」とは逆の論理になっています。論旨に合わせる必要から受身で読まれている（つまり文脈上受身になっている）③が正解です。正答率は31%と低調でした。

【問6】段落分けの問題。

⑤の直後の「夫」が一般論や結論を述べる際の発語であることに気付けば①か③に絞れます。あとは⑦の前後で論理の展開があるので正解は①になります。正答率はなんと13%で全問中最低の出来でした。②の選択率が33%もあったのは、「夫」の意味用法を理解していない証拠です。

【問7】傍線部Dの読み方と筆者の主張の説明問題。

各選択肢は訓読と解釈と筆者の主張の説明の三つから成っています。筆者の主張の説明の検討だけでも正解は導き出せます。筆者が自分の主張を補強説明するために引用した、荘子の「無用の用」の考えを否定するような選択肢を外していくと、②と⑤しか残りません。②は「無用の用」の説明が間違っているの、⑤が正解となります。正答率は31%と低調で、誤答の④の選択率のほうが36%もありました。これは、「豈」で始まっているから反語だと早合点して、訓読と解釈の方面から解いたせいだと思われれます。

明暗を分けた問題

今回の試験で正答率が50%を超えたのは七問中三問しかなく、全般に不出来でした。極端に正答率が低かった問6（段落分け）や、30%台の問2（倒置構文の読み方）、問5（文脈上受身形になる文を含んだ二重否定形の書き下し）、問7（豈で始まる類推疑問形の訓読と解釈）といった、やや特殊な文型に関する設問の出来が明暗を分けたようです。

来年度以降の出題予想と対策

今年の問題では、いま見たように、高校の漢文の学習範囲を超えた特殊な文型・構文が出題されました。このような高度な漢文力を試す傾向が今後も続くのなら、学習の範囲をもっと広げておく必要があります。具体的には、基本句形の習得に際して、典型的な構文だけでなく、その変型や類型にまで広げて学習しておく必要があるようです。

例年必出の漢字対策としては、漢文によく登場する、いわゆる漢文重要語句の読みと意味を押さえることは当然ですが、それ以外の日常よく使う漢字（今年度出題の「習」のような漢字）についても、普段から意味や用法について十分注意を払い、微妙な語感を養っておく必要があるでしょう。

ここ三年、論説に近い随筆からの出題が続いていますが、ほかのジャンルの文章（史伝や詩話等）にも触れておくことが大事です。また、漢詩対策も怠らないようにしましょう。

井口 守 著

『二席 落語で楽しむ古典文学』

(四六判・並製・三英頁・本体、六〇〇円十税)

大修館書店



新学習指導要領に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が加わり、「伝統的な言語文化への興味・関心を広げること」が目標となった。ただ、古典に対する興味・関心を広めることは、簡単なことではない。古典が古典として認められているのは、現代語とは異なる点が多いとしても、それがどの時代にも通じる普遍的なものを持つているからに他ならない。それだけに古典に対する興味・関心を広げることは重要だが、言葉の壁を越えて生徒に親しませることは難しい。

しかし、本書には、その壁をひよいと乗り越えられるような、様々な工夫がされている。その最たるものは、古典作品の登場人物を、落語の登場人物に置き換えてしまうという工夫だ。本書で落語に翻案されている作品は、『古事記』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『枕草子』、『大鏡』、『源氏物語』、『十訓抄』の日本古典七種、『老子』、『莊子』、『十八史略』、『史記』の中国古典四種である。例えば『古事記』では、須佐之男命を、映画「男はつらいよ」の主人公、寅さんに見立てている。高天原から追放されるときのセリフは、「うるさいよ、どいつもこいつも。言われなくても出ていくよ！ じゃあな、あばよ！」である。『史記』では「鴻門の会」が取り上げられており、劉邦を裏切った部下、曹無傷が幫間として描かれている。「えっへっへ、項王様におかれましては、ごきげんうるわしゅう。えっへっへ」というように、曹無傷のずるがしこい姿を巧みに描く。このように、古典に出てくる登場人物らは、落語でお馴染みの人々に見事にキャスティングされていく。熊さん、ご隠居、お侍などなど、落語に馴染

みのない読者にとっては、本書を通して寄席の雰囲気想像できよう。

著者の井口氏は、兵庫県生まれとのこと。その生まれを生かした工夫も窺える。例えば、『古事記』などは東京弁であるのに対し、『大鏡』などでは関西弁が用いられている。こうした使い分けは、登場人物の性格をより個性的なものにしている。興味深いのは『史記』で関西弁が使われていることだ。項羽も劉邦も南方に位置した楚の人である。中国は日本と異なり、その文化は南北で異なるが、北は日本の東の、南は西の文化に通じる。そういう意味で、劉邦や項羽が関西弁を使っているのは絶妙だ。

本書は、落語を通して古典に興味を持たせることだけに終始してはいない。各話の末尾には「嘶のタネ」というコラムを置く。そこで話のあらすじなどを紹介した上で、原文を引く。こうした構成からは、著者の細やかな教育的配慮が窺える。

一つだけ希望を記すと、ウェツプ上で構わないので、これらの嘶を肉声で聴くことができるようにして下さらないだろうか。「そんな希望を挙げるのはよせ」とはおっしゃらずに、寄席に足を運ぶ方々を増やすためにも希望を叶えていただきたい。

(大橋賢一・北海道教育大学)

国立歴史民俗博物館／平川 南 編

『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』

(A5判・上製・三六頁・本体三八〇円十税)

大修館書店



本書は、国立歴史民俗博物館が主催し、二〇一二年一月一五・一六日に行われた同名の国際シンポジウムの記録である。日韓の古代文字資料について、歴博は二〇〇二年にもシンポジウム「古代日本文字の来た道」を開催しており(二〇〇五年、大修館書店より刊行)、それ以降、現在までの一〇年余における最新の発見、研究成果が収められている。

この間に最も大きな進展があったのは、朝鮮半島における新たな金石文、木簡の発見であり、韓国側報告者の各論考で詳しく紹介されている。中でも、六世紀に遡る木簡が大量に見えられたことは、古代日本の歴史、言語などの研究に大きな影響を与えることとなった。

言語表記における朝鮮半島からの影響について、犬飼隆氏の「古代日朝における言

語表記」によれば、「椋」を(物を貯蔵す

る)「くら」、「鑑」を「かぎ」の意で用いる用法や、文末の「之」や文意の切れ目に空格を置くことなどが、日本と朝鮮で共通してみられるという。漢字を使って人名や地名などの固有語を書き表す方法についても、朝鮮半島で開発されて日本列島にもたらされていた。「日本列島における漢字使用は朝鮮半島における実験を前提としている」(河野六郎)ことが、木簡などの具体的事例によって確認されたのである。そして、このことは、言語に限らず政治制度など様々な分野でも同様であったといえる。

市大樹氏の「都の中の文字文化」は、七世紀に多くみられる「某の前に白す」という形式のいわゆる「前白木簡」が、韓国で出土した木簡にも類例のあることを明らかにする。七世紀の飛鳥時代の木簡は、朝鮮

半島からの強い影響を受けていることを指摘する。

また、三上喜孝氏の「古代地方社会と文字文化」は、『論語』の書かれた木簡、稲の貸付制度である出拳を記録した木簡、「龍王」と記された雨乞いの木簡など地方社会で使用された木簡にも、朝鮮半島と共通するものがあることを指摘する。地方社会も、朝鮮半島と直接的で密接な関係を有していたのである。

本書の第四部には、シンポジウムにおける討論が収められている。日本列島への文字の導入から、文体、国字・国訓、文化交流の担い手など、古代日本の文字文化の通史としても読める。関連する資料の図版も豊富に掲載されているので、古代文字文化の全体像を知ることができよう。

なお、この討論のなかで神野志隆光氏は、近年話題となった歌を記した木簡について、「歌の現場」で作られた歌木簡と、編纂されたものである「万葉集」とは、ストレートにならざるべきものではないことを強調している。『万葉集』と現実の歌の世界とを区別すべきことについては、同氏の「固有の言語世界を自明とする文学史から離れて」に詳しい。

(橋本繁・早稲田大学非常勤講師／本書編集協力)